

機関番号：34303

研究種目：基盤研究C

研究期間：2008～2010

課題番号：20520258

研究課題名（和文）テネシー・ウィリアムズの戯曲における日本演劇の影響についての研究

研究課題名（英文）The Influence of Japanese Theatre in Tennessee Williams' Plays

研究代表者

古木 圭子 (FURUKI KEIKO)

京都学園大学・経済学部・教授

研究者番号：80259738

研究成果の概要（和文）：3年間の研究期間内において、Tennessee Williams 作品における日本演劇の影響があったことが明らかとなった。特に *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore* (1963), *In the Bar of a Tokyo Hotel* (1969), *The Day on Which a Man Dies* (2008) においては、歌舞伎や能の要素は、主人公たちの内的葛藤を視覚化する効果を挙げている。そして、Williams が能や歌舞伎の手法を取り入れることとなったのには、歌舞伎や能の現代化に貢献した三島由紀夫との親交という要素も大きかったことも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Through the three-year period of my study, I have clarified that Japanese Kabuki and Nō theatre have considerably influenced the making of Tennessee Williams' plays. In particular, in *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore* (1963), *In the Bar of a Tokyo Hotel* (1969), and *The Day on Which a Man Dies* (2008), Kabuki and Nō theatricality greatly contribute to the visualization of the characters' internal division. Williams' inclination toward Japanese theatre, in addition, had been brought about through his friendship with Japanese writer and playwright, Yukio Mishima.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学(文学)

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：実験演劇、日本演劇の影響、リアリズムと表現主義、芸術家像、三島由紀夫、キャンプ、劇的装置としての登場人物

1. 研究開始当初の背景

(1) 先行研究について—未発表作品

研究開始当時、既に能や歌舞伎の要素を駆使した作品として、先行研究などで認識されていた Tennessee Williams 戯曲には、1960年代の代表作 *The Night of the Iguana*

(1962)、しばしば失敗作と酷評を受けてきた *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore* (1963)、そして *In the Bar of a Tokyo Hotel* (1969)がある。また、テキサス大学の Harry Ransom Center には、*The Day on Which a Man Dies* (2008) という未発表の戯曲原稿

が収められ、“an occidental Noh Play”（「西洋能」）と名づけられている。これは、Williams が三島由紀夫との「長きにわたる友情」と、彼への「敬意の念」を表す印として執筆した戯曲である（Hale 1991、363、Evans 130）。この作品には、能の要素が色濃く現れ、登場人物の一人で三島をモデルとしている Oriental は語り手、コーラス、脇役の 3 役をこなす。この戯曲は、西洋写実劇の伝統から外れ、能の劇的効果を駆使したものであるが、これらの戯曲における日本演劇の要素について詳細に論じた研究論文は、アメリカにおいても日本においても見られないのが現状であった。

Williams 作品における日本演劇の影響を論じた研究論文には、Allean Hale の“The Secret Script of Tennessee Williams”があり、本論は上記の *The Day on Which a Man Dies* を主に論じている。興味深い点は、Williams が三島の『近代能楽集』の英訳版を熱心に読み、能の形式とテーマについて三島と熱心に語り合っていた様子を Hale が指摘している点である（366）。さらに、この作品を発展させた *In the Bar of a Tokyo Hotel* について、「動きの少ない」、「抽象的な」劇の性質と、断片的なセリフが能の形式を適用していると指摘し、この作品が日本演劇への「真の賞賛の印」として捧げられていると述べている（373）。

しかしこの Allean Hale の論文は、Williams と三島の交流の軌跡、両者の戯曲における共通点、彼らの私生活の類似点などを主に示したものであり、Williams の劇作キャリアにおける日本演劇の位置づけを論じたものではない。それ故に、Williams の日本演劇を取り入れた手法の劇的効果についてもさらなる論を展開する必要があると思われた。

(2) 先行研究—*A Streetcar Named Desire* (1947)と日本

Hale はまた、“The Japanese Premiere of *A Streetcar Named Desire*”という論文において、1953 年、日本で『欲望という名の電車』が文学座によって初演された際の状況を詳細に説明し、この上演が日本における Williams の「爆発的人気」を生み出し、その後の「日本演劇の西洋化」を促進することになったと論じている（713）。

しかし、『欲望』が日本で好意的に受け止められ、人気を博した背景には、Williams が既にこの作品の中に、たとえば、紙提灯のような舞台装置に代表されるように、「日本」的要素を含めていたからではないかと考えられ、その点を明らかにする必要があると思われた。実際、Hale の研究においては、その点には言及されていなかった。

Williams 自身、「劇作家のみたニッポン」と名づけられた三島との対談において、日本の作家とアメリカ南部の作家は、どちらも「土に近い」ということと、「家族というものが非常に強い」という意味において、共通点がみられると述べている（202）。またその来日の際、『欲望という名の電車』日本公演の舞台稽古を観た Williams は、歌舞伎の技法を取り入れた演出を試みてもよかったのではと三島に提案をしている（194）。これらの記述から判断すると、Williams は『欲望』執筆当時の 1940 年代当時から、歌舞伎などの日本演劇を自作に取り入れることに興味を持っていたと思われたので、その点も明らかにしたいと考えた。

(3) 先行研究—Williams と日本の親交

石田章氏は、論文「テネシー・ウィリアムズと日本」において、『欲望という名の電車』が日本に紹介された昭和 50 年代初頭からの

日本人研究者による Williams 研究の流れ、三島由紀夫と Williams の親交、両者の共通点などに言及している。石田氏は、Williams 戯曲の中には「日本あるいは東洋的な物にふれた作品がかなりある」と述べ、さらに Williams の描く人物が、彼らの表象する「東洋的」なイメージと「重なり合って」、「見事な劇的效果」を生み出していると指摘している (218)。しかし、それらの東洋的イメージや劇的效果が「どのような経過を辿って生成されていったのか」は、石田氏の論文では明らかにされていない (218)。そこで、Williams が、どのように日本演劇の要素をみずからの戯曲に取り入れる方法を形成していったのか、そのプロセスをたどることも、Williams 研究の新たな題材となると思われる。

(4) Williams 劇における三島由紀夫の影響

久保田裕子氏は、論文「三島由紀夫の演劇論」において、彼が新劇と同時に歌舞伎にも深い関わりを持ち (126)、その「両論の上に打ち立てられたていった」戯曲が、『サド侯爵夫人』であると述べている (132)。さらに久保田氏は、本戯曲の登場人物がそれぞれ「貞淑」、「法・社会・道徳」、「神」、「肉欲」、「女の無邪気さと無節操」、「民衆」、「跋」といった「観念」として存在し、それによって三島が、俳優の「生身の肉体」を表現することを避けたと論じている (129)。登場人物を「観念」として描くという点はまさに、Williams の *The Day on Which a Man Dies* や *In the Bar of a Tokyo Hotel* にも当てはまる。ゆえに、その観点から両劇作家の共通点を探ってゆくことは妥当であると考えられた。

研究代表者古木は、自著 *Tennessee Williams: Victimization, Sexuality, and Artistic Vision* (2007) の第 5 章において、

Williams 作品における東洋的イメージ、日本演劇からヒントを得た舞台装置と Williams の描く芸術家像の関連を論じた。具体的には、*The Night of the Iguana* における Hannah の表象する「東洋」と、抑圧された彼女のセクシュアリティ、彼女の芸術への欲求の関連性を考察し、彼女の葛藤が、Williams の西洋コロニアリズム批判を内包することを明らかにした。また、*In the Bar of a Tokyo Hotel* に登場する日本人バーテンダーの「東洋の偶像」のイメージが、Williams の西洋コロニアリズム批判を具現化していると論じた。

このように、自著においては、Williams の描く主人公の内面と、彼らが具現化する「東洋」のイメージとの関わりを主に論じたのであるが、本研究においては、主に演劇性と技法の面から Williams 劇と日本の関わりを調査することを目的とした。

引用文献

Evans, Oliver. "A Pleasant Evening with Yukio Mishima." *Esquire* (May 1972): 126-130, 174-180.

Furuki, Keiko. *Tennessee Williams: Victimization, Sexuality, and Artistic Vision*. Osaka: Osaka Kyoiku Toshō, 2007.

Hale, Allean. "The Secret Script of Tennessee Williams." *Southern Review* 27 (Spring 1991): 363-75.

---. "The Japanese Premiere of *A Streetcar Named Desire*." *Mississippi Quarterly* (Fall, 1995): 713-33.

Ortolani, Benito. *The Japanese Theatre: From Shamanistic Ritual to Contemporary Pluralism*. Leiden: E. J. Brill, 1990.

石田 章. 「テネシー・ウィリアムズと日本—

その 25 年の流れ」、『同志社女子大学学術研究年報』(1973) : 217-238.

ウィリアムズ、テネシー、三島由紀夫、「劇作家のみたニッポン」、『芸術新潮』第 10 巻 11 号(昭和 34 年 11 月): 194-202.

久保田裕子「三島由紀夫の演劇論—『サド侯爵夫人』と『鱒売恋曳網』から」、『國文学』2000 年 9 月号 (第 45 巻 11 号) : 126-132.

2. 研究の目的

(1) Tennessee Williams 戯曲と日本演劇の接点について

本研究の目的は、Tennessee Williams の戯曲における日本演劇の影響を明らかにし、西洋演劇と日本演劇の融合という斬新な視点をアメリカ演劇に取り込もうとしていた Williams の劇作意図について考察することであった。そして、Williams 研究における新たな動向を開拓し、日本人研究者の視点から Williams 研究の更なる国際化を図ることもあった。同時に、日本を代表する劇作家である三島由紀夫と Williams の接点を探り、両者の影響関係を調べることで、アメリカ、日本という枠を超えた演劇研究を行うことであった。

研究期間内に明らかにしようと考えていたのは、1. Williams がどの程度、日本演劇(能、歌舞伎)の影響を受け、それをみずからの戯曲に応用していたのか、2. Williams 戯曲と三島戯曲は互いにどのような影響を与え合っていたのか、3. 日本演劇に感化された Williams の技法が、どの程度の劇的効果を挙げているのか、あるいは挙げる可能性があるのか、という点であった。

先に述べたように、Williams と日本演劇、三島との関わりを論じた文献は、いずれも彼らの親交や、劇作家としての姿勢、私生活上の類似点への言及に留まったものが多く、劇的効果、題材そのものを論じた文献はきわめ

て少ない状況であった。そこで、これらの点を明らかにし、Williams 戯曲が日本で好意的に受容され、研究の対象となり続けている事実との関連を詳細に探る必要があるのではないかと考えた。さらに、上記に挙げた *The Night of the Iguana*, *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore*, *In the Bar of a Tokyo Hotel* における日本演劇の要素とその劇的効果の有無を明らかにすることも、本研究の主な目的としていた。

(2) 本研究の特色

本研究の学術的な特色は、先行研究においてあまり取り上げられてこなかった Williams 劇における能、歌舞伎の影響を論じ、それによって日本演劇と Williams の接点を探り、国際的、学際的な Williams 戯曲研究の可能性を開くことであった。また、先に述べたように、Williams 戯曲と日本演劇、あるいは三島戯曲との接点に触れた先行研究は、いずれも伝記的資料にとどまり、Williams 作品における日本演劇の要素を詳しく分析したものではないので、本研究ではこの点に的を絞る必要があった。

本研究のもう一つの利点は、国際的な Williams 研究の分野において、日本人研究者としての視点を打ち出すことである。石田氏の論にあるように、Williams は、1950 年代から多くの日本人研究者により論じられてきた劇作家であり、その戯曲の上演回数も多く、日本では他のアメリカ劇作家を凌ぐ人気がある。今回の研究により、日本演劇および日本のイメージが効果的に Williams 戯曲の技法に使用されている点を明らかにし、日本演劇の要素を積極的に取り入れた演出で Williams 劇を日本、あるいは米国で上演する可能性を開くことも、本研究では視野に入れていた。

3. 研究の方法

本研究の計画においては、Williams戯曲における日本演劇の要素、具体的には能、歌舞伎からの影響について調査をすることとした。その具体的な方法として、Williamsの未発表書簡、上演メモなどの資料から、Williamsの三島戯曲への傾倒、および両者の劇作家としての共通点などを考察した。三島由紀夫をモデルとした人物が登場する戯曲 *The Day on Which a Man Dies* のテキストを詳細に検討し、日本演劇の要素がどのように見られるかを考察し、それを発展させた戯曲 *In the Bar of a Tokyo Hotel* との接点を探った。さらに、*In the Bar of a Tokyo Hotel*, *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore*, *The Night of the Iguana* など、日本の要素がみられる作品のテキスト研究、および過去の上演ビデオを鑑賞し、具体的な上演の際に、どのように歌舞伎、能の要素が適用されているかを調査した。

(1)平成 20 年度

平成 20 年度は、主に米国テキサス大学オースティン校の Harry Ransom Center (HRC) において、Williams の未発表原稿（戯曲、書簡、上演メモ等）を調査し、その中にみられる Williams の日本演劇への関心と、実際の上演、演出に向けて彼が指示した日本演劇の要素について考察をした。

特に、最終版に至るまでに数多くの改訂を重ねた *In the Bar of a Tokyo Hotel*, *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore*, *The Night of the Iguana*, *The Day on Which a Man Dies* の初期草稿を詳細に検討し、最終版に至るまでの Williams の劇作技法の変化について調査研究を行った。

研究開始時点では、Williams の未発表戯曲 *The Day on Which a Man Dies* (1960 年執

筆と考えられている) については、すでに原稿を読み、*In the Bar of a Tokyo Hotel* との類似点を調査したが、*The Day on Which a Man Dies* においては色濃かった能の要素、つまり登場人物を個としてではなく、人間の感情や観念の象徴として舞台上に配置するという劇的手法が、*In the Bar of a Tokyo Hotel* においては希薄になっている。これはおそらく、60 年代に入ってから、その劇作意図を大衆に受け入れられなかった Williams が、自身の芸術の理想と、現実の観客や批評家との間に存在するギャップに苦悩しながら、徐々に実験的技法を削減していった結果の表れではないかと予想された。その点を *The Day on Which a Man Dies* から *In the Bar of a Tokyo Hotel* に至る数段階の未発表原稿を詳細に検討することで、明確にしたいと考えた。その後、2008 年に出版された *The Day on Which a Man Dies* の最終版を読み、HRC で入手した草稿との比較検討も行った。また、2008 年 2 月に本作品がシカゴで上演された際の劇評も参考資料とした。これらの調査の結果は、研究発表という形で公表した。

In the Bar of a Tokyo Hotel の初期原稿には、1969 年上演版とは異なり、主人公の夫婦を Mark と Miriam ではなく、The Woman, The Man と名づけ、個々の人物というよりは、夫婦、そして芸術家の二面性を象徴した人物として配し、その点で能の根源的要素を彷彿とさせる構造となっている。また、*The Day on Which a Man Dies* においては主体性を持ち、他の人物を主導する立場であった Oriental が、*In the Bar of a Tokyo Hotel* ではきわめて受動的な Barman となり、表面的には西洋コロニアリズムに迎合するような内容に変化していることにも着目しているので、その変化の軌跡を詳細に調査する計画を立てた。

*The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore*においても、能や歌舞伎の要素を駆使した技法は、初期草稿においてより強調されている。主人公 Mrs. Sissy Goforth は、最終稿にみられるような自我や個性の強い人物としてよりは、「老い」や「死」を象徴する人物として初期草稿で描写されており、「救済」のイメージを具現化した Chris と共に描かれることで、死を目前にした人間の苦闘とその後の救済という普遍的なテーマを表す上で、より効果的な実験的技法を駆使している。その点において、本作品の初期草稿を調査することには意義があると思われた。この調査の結果は、2010年6月にアメリカ学会全国大会における研究発表という形で公表した。

日本的要素が見られる作品中、ブロードウェイでヒットした作品に *The Night of the Iguana* があるが、この作品も初期草稿と最終稿では、日本のイメージの表象方法に異なった点がある。そのひとつに、初期の原稿では、Williams が、主人公 Hannah をたびたび「芸者」のイメージになぞられている点がある。さらに、彼女に日本の着物を舞台衣装として着けさせる場面があることも興味深い。さらに Hannah は、初期草稿においては、最終版よりは詳細に、みずからが経験したアジア旅行について語っている。同時に、初期草稿の Hannah は、どちらかと言えば *A Streetcar Named Desire* の Blanche のように、男性に「奉仕」する南部女性としての役割に忠実であろうとする姿勢が顕著にみられる。

つまり、日本のイメージ、および日本演劇の要素を取り入れることは、劇作家の気まぐれなどではなく、主人公の犠牲者の側面を強調する要素として、40年代の *A Streetcar Named Desire* 執筆当時から内包されていた

ものであると考えられる。未発表の原稿を段階的に調査することで、それらの点を明らかにした。

Allean Hale が指摘するように、Williams は1959年、Frank Merlo と共に *The Night of the Iguana* の背景調査にメキシコを訪れ、その後日本へと旅行をしている。その間、彼らは歌舞伎や能の公演を日本で多く観ており、それが *The Night of the Iguana* の背景に影響を与えたと考えられるので、その点からも、初期の草稿を調査することには意義があると思われた。

同時に、日本国内においては、三島戯曲についての研究を進めたいと考えた。三島戯曲の上演に関する記録、未発表書簡などの文献調査を進め、Williams 作品との共通点を探った。

(2) 平成 21 年

ニューヨーク市マンハッタンにある New York Public Library for Performing Arts、およびコロンビア大学図書館に収められている Williams のコレクションにおいて、Williams が日本演劇に影響を受けて執筆したと思われる作品、具体的には *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore*, *In the Bar of a Tokyo Hotel*, *The Night of the Iguana* を中心に、その過去の上演ビデオを観ると同時に、未発表の書簡や上演メモを参照し、調査を進めた。その上で、上演の際にはどの程度まで具体的に能や歌舞伎の演出が取り入れられていたのか、という点を主に考察した。同時に、三島戯曲および能や歌舞伎などの日本演劇が、過去にどのように米国で受容されていたかという点についても、上記の図書館において調査を行った。

(3) 平成 22 年

平成 22 年度には、前述の作品群ほどには日本演劇の要素を明確に取り込んでいないものの、劇的技法、テーマ、舞台装置などにその影響がみられる作品として、*Clothes for a Summer Hotel*, *The Two-Character Play*, *Suddenly Last Summer* (1959), *A Streetcar Named Desire* などを取り上げ、テキサス大学 Harry Ransom Center および New York Public Library において、上演記録、未発表原稿などの資料を調査することで、前述の日本演劇の影響が顕著にみられる作品との比較を行った。さらに、1950 年代に執筆されていたながら、2004 年まで未発表であった戯曲 *And Tell Sad Stories of the Deaths of Queens...* においても、日本演劇にヒントを得た要素がみられることが認められたので、そのテキストおよび草稿研究、さらに過去の上演ビデオを鑑賞し、舞台装置や技法の面からの考察を行った。

4. 研究成果

本研究により、Williams 作品、特に 60 年代以降の戯曲および生前は未発表であった戯曲の多くに日本演劇の影響がみられることが明らかになった。また、その日本演劇の要素が登場人物のジェンダー、セクシュアリティの表象としても機能し、さらにアメリカ帝国主義に対する Williams の批判的眼差しをも内包することが表明したことも、本研究の成果であると考えられる。

(1) 平成 20 年度

平成 20 年度においては、米国テキサス大学 Harry Ransom Center において、Williams の未発表原稿を調査、考察した。多くの改訂を重ねた *In the Bar of a Tokyo Hotel*, *The Milk Train Doesn't Stop Here*

Anymore, その他 60 年代以降の作品の初期草稿を検討・調査した。その結果、日本演劇の要素を駆使した実験的技法を試みようという Williams の意図が、アメリカ演劇のシステムに迎合することで、次第に軟化していったのではないかという結論に至った。調査研究の結果、*The Day on Which a Man Dies* においては色濃かった能の要素—登場人物を個としてではなく、人間の感情や観念の象徴として舞台に配置するという劇的手法—が、*In the Bar of a Tokyo Hotel* においては顕著ではなくなり、より西洋写実演劇の枠組みに近いものになっているという結論が導かれた。つまり、*In the Bar of a Tokyo Hotel* の初期原稿には、1969 年上演版とは異なり、主人公の夫婦を Mark と Miriam ではなく、*The Woman, The Man* と名づけ、個々の人物というよりは、芸術家の二面性を象徴した人物として配し、その点で能の根源的要素を彷彿とさせる構造となっているのである。

これらの調査、研究結果を、論文と口頭発表において公表した。さらに、平成 20 年 11 月には、国際アジア系アメリカ・イギリス文学学会において、歌舞伎に少なからず影響を受け、韓国仮面劇の要素を加味した作品である Rick Shiomi の *Mask Dance* に関する口頭発表を行い、ウィリアムズ劇における日本演劇の要素を考察する上で関連性を見出すことができた。

(2) 平成 21 年度

平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月までの期間においては、*The Day on Which a Man Dies*, *In the Bar of a Tokyo Hotel*, および *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore* における日本演劇の影響について考察し、日本英文学会のシンポジウムにおいて発表した。本発表では、*The Day on Which a Man Dies*,

*In the Bar of a Tokyo Hotel, The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore*などの戯曲において、Williams が、日本演劇の要素を駆使することで表象する「日本」および「アメリカ」とはどのような存在であるのかを考察した。

また平成 21 度は、「日本」の要素がみられる戯曲として、2004 年まで未発表であった戯曲 *And Tell the Sad Stories of the Deaths of Queens...* を新たな研究対象として採り上げた。男性の服装倒錯者を主人公とする本作品は、Williams の描く女性主人公の多くが、同性愛者の男性が女性に「異装」したものであるとする先行研究の解釈を正当づけるものではなく、両主人公に共通する潜在的芸術性を、意図的に異なったジェンダー、セクシュアリティを用いて描こうとする試みを示す。主人公の「キャンプ」的性質、そしてその性質を強調する者としての日本の家屋を模した舞台装置は、性の表象が人工的に操作可能な要素であり、ゆえに「キャンプ」であるという劇作家の視点を示す。この調査結果は、英米文化学会における研究発表、学術論文として発表した。

(3) 平成 22 年度

平成 22 年度は平成 20~21 年度に引き続き、テネシー・ウィリアムズ劇における日本演劇の影響について研究調査を行った。特に *The Milk Train Doesn't Stop Here Anymore* に注目し、平成 22 年 6 月に、アメリカ学会全国大会で研究発表を行った。本作品は、日本演劇の要素を取り入れた実験的戯曲であり、外枠のアメリカ演劇とその補助的要素である日本演劇の主従関係が劇中で逆転し、アメリカ帝国主義に対する Williams の批判的眼差しを内包する。本作品には、歌舞伎の黒子からヒントを得た人物が登場し、みずからを主人公のアクションを補助する

装置であると定義する。アメリカを象徴する主人公 Goforth 夫人と日本を象徴する黒子の関係は、一見芝居の主たる枠組み（アメリカ演劇）と、従属的装置である日本演劇の関係を表す。しかし彼らはまた、Goforth 夫人を象徴するグリフィンの旗を挙げ下げすることで、彼女の生死を操る。つまり Williams は、日本演劇の要素（黒子）がアメリカ人主人公の生死を支配するという、主従関係の逆転が起きる状況を描き、それによってアメリカのリアリズム演劇の伝統を打破しよう試みているのである。

さらに、本戯曲が執筆された 60 年代は、三島由紀夫との親交があった後であり、三島と Williams の間の日本演劇の議論がこの作品に反映されており、舞台装置、衣装などにも日本演劇の要素が色濃い。これには、三島との交流が大きく影響していることも、調査研究結果から明らかとなった。

また平成 22 年度は、Williams 戯曲がアメリカ演劇におけるリアリズム劇から表現主義への転換期を担った劇作家の一人であるという観点から、アメリカ演劇リアリズムの「父」と評される、19 世紀の劇作家 James A. Herne の戯曲研究にも取り組み、その成果を全国アメリカ演劇研究者会議、英米文化学会の大会のシンポジウムにおいて発表した。平成 23 年は Williams 生誕 100 周年であることから、日本アメリカ演劇学会の第一回大会(7 月開催予定)において記念シンポジウムを行う予定であり、平成 22 年度の研究はその基礎根幹を成すものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①古木圭子、Tennessee Williams 劇にみる「日本」－*The Day on Which a Man Dies*,

*In the Bar of a Tokyo Hotel*を中心に、『立命館国際研究』（立命館大学国際関係学会）、2009、pp. 65-75.

②古木圭子、パロディ化された「悲劇」の主人公—Tennessee Williamsの*And Tell the Sad Stories of the Deaths of Queens...*、『英米文化』（英米文化学会）、2010、pp. 201-214.

③古木圭子、メロドラマとリアリズムの境界—James A. Herne のリアリズム演劇における独自性—、『京都学園大学 経済学論集』、2011、pp. 45-56.

〔学会発表〕（計8件）

①古木圭子、Tennessee Williamsの*The Day on Which a Man Dies*にみる「日本」と芸術家、京都学園大学経済学部学会 平成20年度第6回研究会、2008年11月

②古木圭子、Masking” and “Unmasking” Korean Adoptees: On Rick Shiomi’s *Mask Dance*, The Second International Conference on Asian American and Asian British Literatures, 2008年11月

③古木圭子、テネシー・ウィリアムズ劇にみる日本演劇の要素、日本英文学会 全国大会シンポジウム第8部門「テネシー・ウィリアムズのアメリカ」、2009年5月

④古木圭子、パロディ化された「悲劇」の主人公—Tennessee Williamsの*And Tell the Sad Stories of the Deaths of Queens...*、英米文化学会 2009年度6月例会、2009年6月

⑤古木圭子、*Yellow Fever*から*Mask Dance*へ—Rick Shiomi 劇にみられるアイロニーの変遷、日本演劇学会 近現代演劇研究会 京都集会、2010年3月

⑥古木圭子、Tennessee Williams の *The Milk Train Doesn’t Stop Here Anymore* にみる『装置』としての日本演劇、アメリカ学会第44回年次大会、2010年6月

⑦古木圭子、「転換期」の劇作家—James A. Herne、全国アメリカ演劇研究者会議 2010年度大会シンポジウム、2010年7月

⑧古木圭子、Bronson Howard の *Shenandoah*, James A. Herne の *The Reverend Griffith Davenport* にみる南北戦争と劇的手法の関係、英米文化学会第28回大会シンポジウム、2010年9月

〔その他〕

ホームページ等

<http://opac.ndl.go.jp/articleid/10450678/jpn?ref=rss>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古木 圭子 (FURUKI KEIKO)

京都学園大学・経済学部・教授

研究者番号：80259738